なわてBOOKS【２０２１年５・６月号】

今回も恵文社一乗寺店の能邨さんが、この時期にオススメする６冊の素敵な絵本を選書してくださいましたので順にご紹介致します。

『ねむたいひとたち』　作：ゴフスタイン/あすなろ書房/2017 年刊行

「ねむたいひとたち」というタイトルも中身も不思議な小さな絵本です。ねむたいひとたち、という小人のような風貌の一家が「ねむれればどこでもいい」と、家の中で場所を探したりあくびをしたりクッキーを食べたりにんまりしたり…だから？と問うて答えはありませんが、そのスローなテンポと、結局この人たちは誰？という疑問でついつい読む側も笑ってしまいいつの間にかゆったりとした気分になり眠たくなるかも…と思わせる得体のしれない魅力のある絵本です。当店では大人にも子どもにも人気の一冊です。

『ツリーハウスがほしいなら』
作：K.ヒギンズ、絵：E.ヒューズ/ブロンズ新社/2018 年刊行

「ツリーハウスがほしいなら」という出だしで、それを手に入れるための空想がどんどん広がります。自分たちだけの秘密基地、大好きなお菓子、友達とのおしゃべり、図書館も作っちゃおう。そして忘れてはならないのは、木、そしてそれを取り囲む自然。まずは身近な自然を大切に、そこから羽ばたいて行こう…という大らかな意識が全編を通じて伝わる絵本です。ツリーハウスに関する本は絵本を問わず人気ですが、こちらは、ツリーハウスをとっかかりに想像力の豊かさや気づきの大切さを与えてくれる作品と言えるかもしれません。

『おばけでんしゃ』　作：内田麟太郎、絵：西村繁男/童心社/2007 年初版

おばけの世界の住人たちがおばけでんしゃに次々と乗り込みます。各駅での奇妙な風景、乗り込むおばけたちの個性豊かさ、コワ面白さ。賑やかなページが見ていて楽しく、最後はでんしゃが人間界に到着しおばけたちも人間に化け..というところで終わりますが、どのページを開いても緻密に描かれた場面が本当に魅力的です。ページからページへ登場人物（おばけ）たちが巧みにつながっているところも、「やこうれっしゃ」などでも知られる西村繁男さんならではの遊び心と絵の細かさが生きています。

『どうぶつクッキー』　作：彦坂有紀・もりもといずみ/学研/2020 年

おさるさーん、うしさーん、ねこさーんと左のページで呼びかけたら、右のページには、可愛らしい動物たちのシルエットが。その姿はまるで焼きたてのクッキー！…ではなく、日本の伝統的な木版画を継承する若き木版画作家による版画作品です。どうみてもクッキーにしか見えない焼き加減、色合い、その美味しそうな風情。これ本当に版画？クッキーじゃないの？と言いつつ読むのも楽しいかもしれません。動物絵本としても、食べ物絵本としても楽しめる、低年齢向けの作品です。

『おうさまがかえってくる 100 びょうまえ！』　作：柏原佳世子/えほんの社/2018 年

とある王国。王様がおでかけの間に家来たちは好き放題。王様の部屋で遊んだりベッドで寝てみたり。ところが王様が思ったよりも早く帰ってきたのを窓から見て慌てて「それ！あと 100 秒で元に戻せ！」。それから始まる 100 から 1 までのカウントダウンがなんといっても見どころでありこの絵本の楽しさです。リラックスしすぎていた衛兵姿の家来たちが急いで着替え王様を迎える準備をする様子がフィルムの逆回しのように展開され、見ている方もはらはら。数を数える楽しさも伴った、アイデアが愉快な一冊です。

『バスザウルス』　作：五十嵐大介/亜紀書房/2020 年初版

町外れに放置されていたバスの車体がある日、生命が宿ったかのように足が生えて歩き出し「バスザウルス」になってしまいます。夜の街を徘徊していたら、同じように一人歩いていたおばあさんが乗客となり…。乗り物絵本としても妖怪絵本としてもちょっと変則なこちらの絵本は、漫画家・五十嵐大介の絵本作家としての側面も楽しめる一冊です。個人的にも、忘れ去られたバスとおばあさんとの出会いというちょっと切ない物語に共感してしまいます。

【なわて BOOKS】
毎月、京都の恵文社一乗寺店さんからなわて幼稚園の図書室に届く、スタッフがお薦めする最新の絵本や話題の絵本をご紹介しています。

【恵文社一乗寺店】
２０１０年にイギリスのガーディアン紙が発表した「世界でもっとも素晴らしい書店１０選」に日本から唯一選ばれた京都・一乗寺にある書店。

http://www.keibunsha-books.com/